

幼児用図型テスト



黒田実郎

今日、二十余種にのぼる幼児用知能テストが、わが国において使用せられている。どのテストにも一長一短があるので、いざテストをしてみようという段になると、どのテストがよいのか戸惑いがちである。一般によく使われているからといって、そのようなテストが必ずしも良いテストであるとは言うことが出来ない。しかし盛んに使用せられるからには、そのテストには他のテストに比べてなんらかの長所があるに違いない。

テストの利用が盛んなアメリカでは、一体、どのようなテストが最も頻繁に使われているのであろうか。フォーダム大学のアン・アナステーシーの調査によると、先ず第一にあげられるのは、スタンフォード・ビネー・テスト、ついでウエクスラー・ベルビュー・テスト、第三番目にグッドイナフのドロウ・ア・メン・テストの順になっている。テストにくわしくないかたの為にもう少しわかりやすく説明すると、スタンフォード・ビネー・テストと言うのはわが国において使用せられている、鈴木ビネー・テスト、あるいは田中ビネー・テストに相当するものである。言うまでもなく、フランスのビネーとシモンによって考案せられたビネー・シモン・スケールが、各園においてそれぞれ改訂せら

れ、その国の児童をもとにして標準化されたテストである。第二番目のウエクスラー・ベルビュール・テストは比較的新しいテストで、わが国では戦後に南博と依田新によって紹介せられた、ウエクスラー・ベルビュール法改訂知能診断テストと、児玉省、品川不二郎によるWISC知能診断検査とがある。第三番目のグッドイナフのドロー・ア・メン・テストは桐原葆見によって日本の幼児の為の標準がつくられ、「自由画による幼年の精神発達測定」として知られているものである。

これら三つのテストはわが国においてどの順序で頻繁に使用せられているのかつまびらかではないが、ビネー・テストや自由画による測定方法に比較して、ウエクスラー・ベルビュール・テストは実施にかなりの時間がかかる為、それ程多く利用されていないのではないかと考えられる。

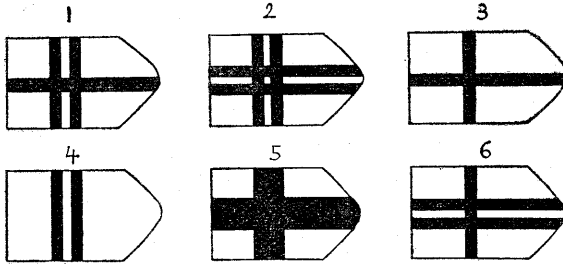
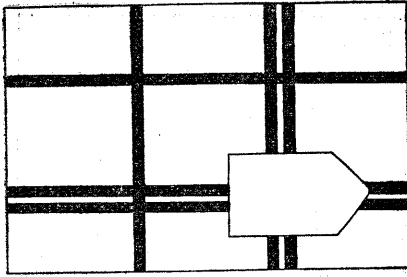
いずれにしてのテストの実施に際して当面する最初の問題は、被検児のテストに対する意欲の如何である。ある種の子ども、とくに知能が低いと思われる子どもや、性格的に問題を有する子どもは、なかなかテストを受けようとしなない。なだめすかしてやっとなテストを受けさせることが出来ても、これらの子どもたちは果してテストの問題を解決する為に、自分の持てる力をじゅうぶんに發揮しているのかどうか疑問を持たざるをえない場合が多々ある

のである。したがってテストに対して子どもたちが積極的に取り組むような意欲を起させ、また興味をひき起こさせるような問題を与えることが出来れば、幼児の実力をよりよく測定することが可能となるであろう。前述の三つのテストは程度の差こそあれ、子どものテストに対するモチベーションをじゅうぶんに高めるものとは言い得ない。幼児の中には、「人物画を描きなさい」と言ったような極めて簡単に思われる問題に対してすら、容易に反応しないものが、実際には多々あるのである。

次にあまり長い時間のかかるテストは幼児に対しては適当でない。ウエクスラー・ベルビュール・テストには言語的検査に六つのサブテスト、動作的検査にも六つのサブテスト、合計十二種類の知的能力を測定することが出来るようになっており、優れたテストには違いないが、全部のサブテストを実施した場合にはあまりにも時間がかかり過ぎて、被検児の疲労と倦怠が甚だしい。その為にはショート・フォーム式テストが考案せられて、都合により数種類のサブテストは省略することが出来るようになっていた。幼児に対して実施するテストは長くても一回三十分位が適当ではないかと考えられる。

次に採点方法の客観性と簡易性ということも大切な問題である。ウエクスラー・ベルビュール・テストやビネー・テストの言語

A 8



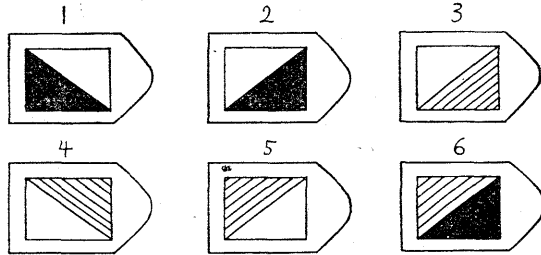
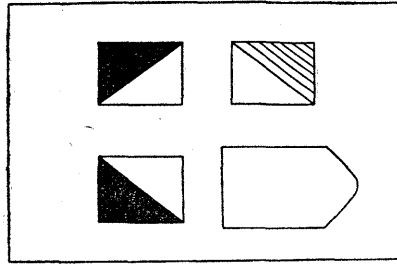
的テストの中には、採点者の判断で正誤が左右されやすいものがあるし、自由画による測定法にしても、採点者の絵に対する判断次第で多少の開きが出来る。さらにウエクスラー・ベルビユー・テストやビネー・テストを多数の子どもに施行した場合、採点にかなりの時間と手間がかかるものである。

以上に指摘したようなテスト実施に当たっての諸問題を比較的うまく克服しているテストとして、私はジョン・シー・レブンのカラード・プログレッシブ・メトリシス・テストを紹介しておきたい。

このテストは一九三八年にイギリスで出版せられ、数度の改訂を経て今日に至っているが、わが国をはじめ東洋の諸国では未だに全く知られていない。ヨーロッパ諸国ではかなり使われているらしく、その他、アメリカ、カナダ、オーストラリア、アルゼンチンなどでも使われている。

カラード・プログレッシブ・メトリシス・テストは五才から十一才位の子どもを対象としたテストで、さらに青年より老人を対象としたスタンダード・プログレッシブ・メトリシス・テスト、優秀成人のみを対象としたアドバンスド・プログレッシブ・メトリシス・テストがある。

幼児を対象としたカラード・プログレッシブ・メトリシス・テストは赤・青・黄・緑の四原色を使った美しい三十六題の図型テストであり、各問題図型の一角は空白になっている。その空白にちょうどあてはまる位の大きさの図型が六つあって、子どもは自分の判断によって問題図型の空白の個所に挿入すれば一番よいと思われるものを六つの図型の中から選び



出すのである。したがってテスト実施に当たっての指示は極めて簡単に「これらの図型（あるいは絵）の中で、この空いた所にどれを入れると一番良いと思いますか。」と言うだけで、実際にテスト図型を見せられた場合には言語的な指示がなくとも自然にテストの意味がわかるように、最初の問題は極めてやさしく漸次困難度

を増してゆくように配列されている。したがって三十六問中、終に近い数問題はかなりむずかしく、成人でも注意をしないと間違え可能性がある。

六つの図型の中から一つの正解図型を選び出すマルチプル・チョイス式テストであるから、偶然でも六分の一の正答がえられる。したがって三十六問中六題の正解を得ても、この程度では被検児が自分で正しい判断を下して解答したとは断定することが出来ない。確率の計算をしてみると、三十六題中十一題の正解があった場合、偶然ではなく被検児が自ら正解図型を選んだと言って差支えないようである。

何題正解したかということは、子どもが指さすごとに直ちに正誤がわかるはずであるから、結果の整理には全く手数を要しない。正解数とその被検児の年令を、パーセントイル・ポイントに換算する表にあてはめて、子どもの知能が何パーセントイル順位にあるかというところを見るのである。したがってテストに必要な時間は約十五分前後、極めて時間のかかる被検児でも三十分を越えることは殆んどない。採点およびパーセントイル順位への換算には一分を要しない。

換算表にあてはめた結果、九十五パーセントイル以上は知能優秀、七十五パーセントイル以上は平均上知、二十五パーセントイ

ルから七十五パーセントイルまでは普通（あるいは平均）、五パーセントイルから二十五パーセントイルまでは平均下知、五パーセントイル以下は不良（あるいは精神薄弱）というように区分される。以上のように、このテストの結果は知能指数や標準標点として表現せられるのではなく、パーセントイル順位として示されるのである。

単にテストの施行および採点が容易で短時間に実施出来るということだけがこのテストの特色ではない。被検児のテストに対するモチベーションが極めて高いということが、特筆すべき点である。私は現在まで約三百人に近い幼児にこのテストを施行しているが、テストを完了するのに困難を感じたのはその中わずかに一名で、他の幼児はすべて非常な興味をもって全問題を完了した。ことに、他のいかなる知能テストをも実施することが困難であった数名の幼児に対しても、このテストをかなり容易に実施することが出来た。このような点から、カラード・プログレッシブ・メトリシス・テストの実際的価値は甚だ高いと言わねばならない。

レブンの報告によると、カラード・プログレッシブ・メトリシス・テストとターマン・メリル・スケール）スタンプフォード・ピネー・テストとの相関は〇・六六、クリチュトン語彙検査（イギリスの単語理解力テスト）との相関は〇・六五である。私は八

十名の幼稚園児に、鈴木ビネー・テスト、自由画による幼年の知能測定法およびカラード・プログレッシブ・メトリシス・テストの三種類のテストを実施したところ、鈴木ビネー・テストとメトリシス・テストとの相関は〇・五九、自由画による知能テストとメトリシス・テストの相関は〇・五七でいずれも一パーセント・レベルで有意な相関関係のあることを見出している。

レブンのテストで考慮しなければならぬのは、三十六題とも図型によるテストである為、知能の一般的な力を測定しないで、ある特定の因子のみを測定しているのではないかという点である。リモルデは一九四八年にカラード・プログレッシブ・メトリシス・テストの因子分析的研究を発表しているが、それによると、レブンのテストはサーストンのいわゆる帰納因子（与えられた材料を包括するような能力）および空間因子（図形の異同等を想像的に処理する能力）に当るものを測定しているのではないかという結論を下している。レブン自身もこのテストがある特定の知能因子のみの測定に終ることを恐れて、メトリシス・テストとクリチュトン語彙検査との併用を勧めている。前述の諸相関係数から明らかのように、レブンのテストは語彙検査のみならず、ビネー・テストのような一般知能検査や、自由画による知能測定法のような特殊な検査とも有意な相関関係を有しているので、レブンのテス

トを単独に使用した場合でも、幼児の知的能力をかなり正当に評価することが出来る。

一九四八年にリモルデは一六八〇人のアルジュンチンの児童にスタンダード・プログレッシブ・メトリシス・テストを実施した結果レブンがイギリスの幼児から作ったパーセントイル・ノーム（基準）が、アルジュンチンの幼児にもあてはまるということを報告している。この事實は、メトリシス・テストが言語や文化的背景の異なる人種に対しても容易に使用し得るものであることを証明している。したがってレブンのテストは異なった言語を使用する人種間の知能を比較しなければならぬような場合にたいへん便利である。米国の心理学者、アナステーシーは、レブンのテストを、いろいろな文化に共通した内容を含むテストとして、クロスカルチャ・テストという範疇の中に入れてゐる。

テストの実施に当って複雑な説明をしなければならぬようなものは、知能の低い子どもや、言語をじゅうぶんに理解し得ぬ子ども、また聾啞のように身体的欠陥のある子どもには向かない。レブンのテストはこのような身心にハンディキャップを持った子どもに対しても、その実施が比較的容易である。さらに図型を浮彫にさえすれば盲人に対しても実施が可能となるであらう。

以上に述べたように、レブンのテストは、極めて優れた諸特徴を備えている。しかしながらレブンが併用をすすめるクリチュートン語彙検査を翻訳して、そのままわが国の幼児に施行してみても、それらの単語の重要度が国によって異なるから、何ら意味をなさない。したがってレブンの図型を主とするテストの欠陥を補う為には、既存のわが国で使用されている語彙検査を使うか、あるいはクリチュートン語彙検査に代るものを新しく作ることが望ましい。

（注）残念ながら、レブンのテストに関しては、邦語の文献が全くない。

原著は一九五六年に英国のルイス社から改定版が出版されている。日本で容易に入手し得る文献としては、筆者の書いた英文の「カード・プログレッシブ・メトリシス・テストのわが国の幼稚園児に対する適用」という論文がブシコロギア第二巻第三号に掲載せられている。レブンのテストをわが国においても一般に使用し得るよう、目下準備中である。

（聖和女子短期大学）